

認知症高齢者を対象とした園芸療法プログラム中に 対象者が発した単語総数と品詞割合について

*Total Number of Words and Proportion of Parts of Speech Uttered by Elderly with
Dementia During a Horticultural Therapy.*

田崎史江¹⁾ 久利彩子¹⁾ 竹内直子^{1,2)}

¹⁾ 大阪河崎リハビリテーション大学：大阪府貝塚市水間 158 番地（〒 597-0104）

²⁾ 大阪府立大学理学系研究科：大阪府堺市中区学園町 1 番 1 号（〒 599-8531）

Fumie Tazaki¹⁾, Ayako Hisari¹⁾, Naoko Takeuchi^{1,2)}

¹⁾ *Osaka Kawasaki Rehabilitation University : 158 Mizuma, Kaizuka-city, Osaka 597-0104, Japan*

²⁾ *Osaka Prefecture University, Graduate School of Science : Gakuen-cho, Naka-ku, Sakai-city, Osaka 599-8531, Japan*

要旨：本研究の目的は、認知症高齢者を対象とした園芸療法プログラム中の発語量および品詞割合を調査し、園芸活動プログラムをより効果的に活用できる可能性について検討することである。

対象者は、認知症高齢者 5 名とした（年齢範囲：78 ～ 91 歳、男性 1 名・女性 4 名）。対象者に、6 種類の園芸療法プログラムを実施し、全ての会話を記録した。対象者の会話から単語を抽出し、総単語数と品詞を算出・分類した。総単語数は、園芸療法プログラムによる有意差が認められた。品詞出現割合も、園芸療法プログラムによる有意差が認められた。形容詞・感動詞の占める割合が多かったのは「押し花クラフト」で、植物を使った創作活動であった。今回の研究結果より、園芸療法プログラム内容によって発語量や品詞割合が異なることが明らかとなった。これは、プログラムに伴う効用や対象者への療法士の関わりが影響していることが理由の一つと考えられた。また、同じプログラムでも、療法士の対象者への関わりによって、対象者の園芸療法介入効果が左右される可能性があることが示唆された。

キーワード：認知症高齢者、園芸療法、園芸療法プログラム、会話、単語、品詞

¹⁾ 田崎史江 Fumie Tazaki
E-mail : tazakif@kawasakigakuen.ac.jp

1. 序文

認知症患者のリハビリテーションは、認知症の進行時期により方法が変わってくる¹⁾。軽度認知障害の段階では、運動療法や記憶トレーニング、計算の学習課題を通じて注意・記憶・遂行機能のトレーニングを行う認知機能リハビリテーションが行われる。認知症が進行してくると脳活性化リハビリテーション²⁾や非薬物療法を使う場面が多くなる。脳活性化リハビリテーションは、①快刺激が笑顔を生み意欲を高める ②褒めることがやる気を生む ③会話が安心を生む ④役割を演じることが生きがいとなることを原則としている。認知機能そのものを高めようとするのではなく、認知症があっても前向きに楽しく生活できることを目標とし、回想法やゲーム、芸術など様々な手法を用いる²⁾。認知症疾患診療ガイドライン 2017 によると、認知症の非薬物療法とは、認知行動療法、認知刺激、運動療法、回想法、音楽療法、ADL 訓練などが該当するとしている³⁾。認知行動療法とは行動科学と認知科学を臨床の諸問題へ応用したものと定義されており、①問題を具体的な行動（思考、情緒、運動すべてを含む精神活動）としてとらえ、どのような状況でどのような精神活動が生じるのかという行動分析を行う ②問題解決のための治療目標を具体的に明確にし、その変容を目指す治療法である⁴⁾。認知刺激は、リアリティーオリエンテーション（Reality Orientation：以下 RO）から発展してきたものである。RO は、主に見当識障害がある認知症高齢者を対象に行われる行動修正法と環境療法の原理を組み合わせた治療法である⁵⁾。山根は、RO の本来の目的は見当識障害の進行防止や改善ではあるが、認知症症状が中等度以上になると見当識障害の改善よりも、季節や日時など生活に関することを介してお互いに生まれるコミュニケーションが大切だと述べ、五感や生活経験を活かし、回想の技法や作業療法のように実体験を通し、現実感を保ち、取り戻す関与が良いとしている⁵⁾。加えて、認知症高齢者に対する、認知機能の維持向上のためには、コミュニケーションを促し、社会性を維持することが必要である。なお、前述の認知症疾患診療ガイドライン 2017 では、軽度認知障害の人に対しても薬物療法や非薬物療法を適応すると述べられており、早期よりこうした治療法を選択して取り組むことが推奨されている。

コミュニケーションを促す方法として、日常的な声かけなどが用いられている。例えば、目をみながら挨拶を交わす、わかりやすい言葉で気分を聞く等である。園芸療法もまた、このコミュニケーションを促す一助になり得る。園芸療法では、植物が育つ季節に合わせてプログラムを実施する。植物が季節感や時間の感覚、基本的な生活のリズムを取り戻す刺激となることで、ひとや場所、時間などの見当識能力の低下を防ぐ⁶⁾。園芸療法プログラムには、対象となる人たちの思い出の植物を用いて、昔

ながらの植栽方法で園芸作業を行い、作業中の会話では過去の思い出を引き出すように誘導する。草花や野菜を育てる時は、将来の庭の様子を想像し、植物の成長を楽しみにしながら世話をしていく⁷⁾。認知症高齢者を対象とした園芸活動に関する先行研究の介入研究では、増谷は、園芸活動プログラム中および終了直後に植物の刺激や変化に一致した感情表出、自発的な世話、他者との交流などの行動や、季節の植物による見当識の向上が見られたこと⁸⁾や、2 回の園芸活動セッション後にはリハビリテーション・活動や意志疎通に対しての意欲の有意な改善がみられたと報告している⁹⁾。寺岡らは、園芸活動前後の比較で活動後に単語記憶が有意に改善されたこと¹⁰⁾や、対象者が園芸経験者の場合は活動中に園芸知識が想起され、その知識を活用した指導的立場で作業を遂行することができ、未経験者の場合は園芸活動を通して日常生活の思い出を想起していたことを報告している¹¹⁾。しかし、園芸療法プログラムの違いによる発語量を定量評価したものは見当たらない。発語量の違いに基づいてプログラム内容の検討を行うことが、より効果的な園芸療法実施につながるのか不明である。そこで、筆者らは、認知症高齢者を対象とした園芸療法プログラム実施中の発語量を調査し、園芸活動プログラムをより効果的に活用できる可能性について検討することとした。

2. 方法

2.1 対象者

認知症対応型グループホーム 1 施設で入所している年齢 78 ～ 91 歳、男性 1 名と女性 4 名の合計 5 名を対象とした。参加者は全員認知症の診断を受けている。対象者の認知症レベルは、初回プログラム開始前に Mini-Mental State Examination（以下 MMSE）で評価した。対象者らは、日常会話において聴力が問題となることがなく、また、言語理解能力は維持されており、質問に対しては自らの判断で返答が可能である。対象者情報については初回プログラム開始前に、施設職員からの聞き取りやカルテ等記録物から収集した。日常的な生活の様子、体調についても施設職員から情報収集し、園芸活動を行うのに特記がないことを確認した。対象者の概要を表 1 に示す。

対象者に対し、本研究の目的と方法の説明を口頭で実施したが、十分な理解が得られたかどうか不明なため、対象者のご家族にも本研究の目的と方法を口頭および書面で説明し、書面にて同意を得た。

本研究は大阪河崎リハビリテーション大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 OKRU28-B205）。

表 1 対象者の概要

対象者	年齢	性別	疾患名	MMSE	行動・ 心理症状 昼夜逆転 徘徊	歩行 能力	農園芸 の経験
A	90	男	認知症	5/30	徘徊	自立	有
B	78	女	脳血管性 認知症	15/30	徘徊	見守り	無
C	80	女	アルツハイマー型 認知症	12/30	徘徊 妄想	自立	無
D	88	女	認知症	15/30	暴言	介助	有
E	91	女	認知症	15/30	徘徊	自立	有

2.2 園芸療法プログラム

表 2 に、実施した園芸療法の概要を示す。園芸療法プログラムの実施は 2016 年 4 月 5 日～5 月 16 日の間、週に 1 回、13 時 30 分から 15 時までの 90 分間実施した。園芸活動は全 6 回実施した。場所はグループホームのデイルーム内、大阪河崎リハビリテーション大学実習用農場（第 2 イネブルガーデン）の畑で行った。農場でプログラムを実施した 2016 年 4 月 5 日の天候は晴れ、気温 16℃であった。プログラム実施時、対象者以外に、6 名（園芸療法士 2 名、介助者として介護職員・学生 4 名）が、対象者支援を実施した。

2.3 会話の記録と解析

全 6 回の園芸療法プログラム中の会話は、ボイスレコーダー（OLYMPUS Voice-Trek VN-8100PC）で記録した。記録できた会話から、対象者の会話のみ抽出した。抽出した文章データから、AI テキストマイニング（株式会社ユーザーローカル）を用い、単語の抽出と品詞分類を実施した。品詞分類は、名詞・動詞・形容詞・感動詞とした。

各プログラムにおける単語の総数を算出した。プログラムにより単語の総数は異なるか否か、一様性の検定および残差分析を用いて評価した。

また、分類された各品詞における単語数の、単語の総数における割合を算出した。プログラムにより品詞の出現割合は異なるか否か、独立性の検定で評価した。

計算は、統計解析ソフトウェア R（The R foundation for Statistical Computing, version 4.1.0）で行った。有意水準は 5%とした。

3. 結果

表 3 に、園芸活動中の会話における単語の総数を示す。単語数が有意に多いプログラムは、多いものから順に、「花・野菜の種まき」「花苗・野菜苗の移植」「ワタの種取り・発芽苗の観察」であった。単語数が有意に少ないプログラムは、少ないものから順に、「ジャガイモの種イモの植付け」「創作活動「押し花クラフト」」であった。表 4 に、園芸活動中の会話において 5 回以上出現した単語を、単語の総数が最も多い「花・野菜の種まき」と、単語の

総数が最も少ない「ジャガイモの種イモの植付け」で示す。

図 1 に、園芸活動中の会話における各品詞の出現割合を示す。プログラムによる品詞の出現割合について実施した独立性の検定結果は、X-squared = 291.09、p-value < 2.2e-16 となり、プログラムにより品詞が有意に異なっていた。残差分析の結果、品詞出現割合が標準的な出現割合との違いが最も小さい（つまり残差の絶対値合計が最も小さい）園芸活動は、「ジャガイモの種イモの植付け」で、品詞出現割合が標準的な出現割合との違いが最も大きい（つまり残差の絶対値合計が最も大きい）園芸活動は、「創作活動「押し花クラフト」」であった。

表 5 に、園芸活動中の会話における品詞別の単語の代表例を、標準的な品詞出現割合との違いが最も小さかった「ジャガイモの種イモの植付け」と、最も大きかった「創作活動「押し花クラフト」」で示す。

表 3 園芸活動中の会話における単語の総数

ID	園芸活動名	単語の総数
a	ジャガイモの種イモの植付け	170 ▼
b	花・野菜の種まき	598 △
c	エンドウマメの収穫	439
d	ワタの種取り・発芽苗の観察	494 △
e	花苗・野菜苗の移植	528 △
f	創作活動「押し花クラフト」	312 ▼

△：有意に多い

▼：有意に少ない

表 4 園芸活動中の会話において 5 回以上出現した単語

「花・野菜の種まき」 (単語の総数：598)	「ジャガイモの種イモの植付け」 (単語の総数：170)
ありがとう (21)、入る (18)、書く (16)、入れる (16)、いい (14)、分かる (12)、オクラ (10)、ゴーヤ (9)、種 (9)、こっち (9)、赤丸 (8)、はつ (8)、無理 (8)、足る (8)、あみ (7)、ちゃう (7)、のん (6)、場面 (6)、どっち (6)、いける (6)、へたくそ (5)、ひまわり (5)、先生 (5)、いく (5)	イモ (6)、灰 (5)、切る (5)

() の数字は出現回数

表 5 園芸活動中の会話における品詞別の単語の代表例

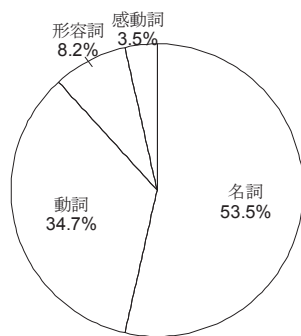
	品詞出現割合が標準的な出現割合との違いが最も小さかった園芸活動 (名詞：動詞：形容詞：感動詞 = 53.5 : 34.7 : 8.2 : 3.5) 「ジャガイモの種イモの植付け」	品詞出現割合が標準的な出現割合との違いが最も大きかった園芸活動 (名詞：動詞：形容詞：感動詞 = 42.3 : 30.1 : 18.9 : 8.7) 「創作活動「押し花クラフト」」
名詞	イモ (6)、灰 (5)、ジャガイモ (4)	先生 (12)、紫 (6)、名前 (5)
動詞	切る (5)、植える (3)、慣れる (3)	書く (13)、入る (5)、置く (4)
形容詞	すごい (2)、よい (2)、ナウい (1)	いい (24)、可愛い (12)、大きい (5)
感動詞	ありがとう (3)、はいはい (1)、こら (1)	ありがとう (19)、すいません (2)、こんにちは (2)

() の数字は個数

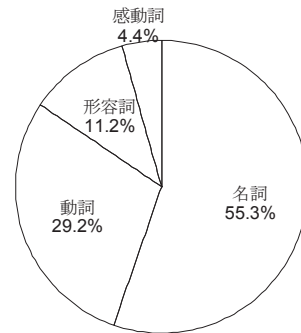
表2 実施した園芸療法の概要

ID	実施日	活動名	実施場所と時間	プログラムの進行と活動内容、肢位	植物および園芸活動と対象者・療法師の関わり、効用
a	4月5日	ジャガイモの種イモの植付け	ガーデン内控室→畑 90分間	<ul style="list-style-type: none"> 導入：4月に植える野菜の想起 ⇒ジャガイモの芽の観察⇒植え付け前処理 ⇒畑の土づくりと畝立て⇒種イモの配置と植え付け⇒看板を書く まとめ：作業の振り返りと感想、次回の予告 ・畑の土づくりと畝立て時には、立位(車いす)を利用して人へは、低い椅子に移乗)にて行った 	<ul style="list-style-type: none"> ジャガイモの芽の観察：参加者と療法師はジャガイモの芽を観察しながら会話をした(エピソード記憶の再生) 野菜に関する会話(野菜名を想起) 種イモを畑に植える作業：療法師は転倒しないようにスク管理をおこなった(不整地での立位姿勢保持と立位バランスの向上、参加者の共有体験) 畝立て：粗大動作の反復、参加者の畑を耕したり畝立てをする時に、手続き記憶の再生を優先するため、動作指示や声掛けは行なわなかった(筋力や筋持久力の維持、手続き記憶の再生)
b	4月11日	花・野菜の種まき	グループホーム内デイルーム 90分間	<ul style="list-style-type: none"> 導入：先週の園芸活動の振り返り ⇒種袋(の写真)を見て想起⇒ピニールポットに土入れ⇒花と野菜の種まき⇒植物名のラベル書き⇒ジョウロで水やり まとめ：作業の振り返りと感想、次回の予告 ・活動中の肢位は、椅座位で行った 	<ul style="list-style-type: none"> 花や野菜に関する会話：種袋を手に取り、植物名を読んだり、植物に関する自らの体験を話した(植物名の想起) ピニールポットへの土入れ・種まき：参加者の質問や要求に対して療法師が答え、参加者が迷わないように声掛けを行なった(手指の巧緻動作、目と手および両手動作の協調運動の向上) ラベル書きでは、何の種をまいたか記憶をたどりながらの会話をした 作業全般(作業遂行のための注意力、集中力、持続性の向上)
c	4月18日	エンドウマメの収穫	グループホーム内デイルーム 90分間	<ul style="list-style-type: none"> 導入：先週の園芸活動の振り返り ⇒枝ごと収穫して持ちこんだエンドウマメの入った大袋を見る⇒大量のエンドウマメを袋から出して見る⇒マメ取り⇒すじ取り⇒マメをゆでて試食 まとめ：作業の振り返りと感想、次回の予告 ・活動中の肢位は椅座位で行った 	<ul style="list-style-type: none"> デイルームにエンドウマメを全量持ち込んだ：参加者は目の前に出された大量のエンドウマメに対して驚き、喜びの言葉を発した マメ取り、すじ取りを媒介に回想、「ながら」作業となった、参加者のマメの取り方について療法師は手続き記憶の再生を優先するため動作指示は行なわなかった：単純な上肢と手指動作の反復(手指の巧緻動作・ピンチ力の向上、目と手の協調運動の向上、手続き記憶の再生) 作業全般(作業遂行のための注意力、集中力、持続性の向上) 試食は参加者のエンドウマメの記憶が途切れないように、参加者の視界からエンドウマメを消えないようにして、試食まで繋げていった：味覚からの刺激入力(感覚機能の維持)
d	4月25日	ワタの種取り・発芽苗の観察	グループホーム内デイルーム 90分間	<ul style="list-style-type: none"> 導入：先週の園芸活動の振り返り ⇒ワタの観察と話題提供⇒ワタの種取り 作業の振り返りと感想、次回の予告 ・活動中の肢位は椅座位で行った 	<ul style="list-style-type: none"> 参加者は初めてワタの実を見て、種取りの体験をした：興味・関心、好奇心への刺激(認知機能の維持) ワタに関する知識(意味記憶の再生) 手探りでワタの種が有るのを確認し、綿毛が絡まり取りにくい種を指でつまみ出すようにして取った。 療法師も参加者と一緒に種取りをする並行作業の形態をとった：柔らかな感触を楽しむ、指尖部の触覚に頼った種探し(感覚機能の維持) 作業全般(作業遂行のための注意力、集中力、持久力の向上) 作業後には疲労を訴える発言があった
e	5月9日	花苗・野菜苗の移植	グループホーム内デイルーム 90分間	<ul style="list-style-type: none"> 導入：先週の園芸活動の振り返り ⇒花と野菜苗の観察⇒プランターに移植⇒ジョウロで水やり まとめ：作業の振り返りと感想、次回の予告 ・活動中の肢位は椅座位で行った 	<ul style="list-style-type: none"> 植物の成長を観察した(注意機能や興味・関心の向上、現実見当識の向上) 参加者は各自が3週間前に播種した苗の移植を担当した 移植するためにプランターを各自に1つ準備した：作業工程の理解、苗を丁寧に扱う(作業遂行のための理解力や注意力など認知機能の向上) 農業経験がある参加者は自分で進めていけることが多く、発言数は少なかつた 非経験者は療法師の助けがないと作業が進まなかつた
f	5月16日	押し花クラフト	グループホーム内デイルーム 90分間	<ul style="list-style-type: none"> 導入：先週の園芸活動の振り返り ⇒作品見本と押し花を見ながら選ぶ⇒作品づくり まとめ：作品の披露と感想、最終回の挨拶、記念撮影 ・活動中の肢位は椅座位で行った 	<ul style="list-style-type: none"> 植物の活用：育ったものを利用、消費する楽しみ(欲求を満たす) 創作：楽しみが体験：作品見本を提示してから創作を開始、押し花は参加者が選べるようにし、その間療法師は言葉をかけないように配慮した。押し花を貼る等に介助が必要な時は積極的に関わった(自己表現を引き出す) 作品披露：「よくできたと思うところ、自慢したいところはどこか」と聞き、それに対しての返答にフィードバックした。他者からの賞賛を受ける(他者との交流、有用体験をする、自己評価を高める)

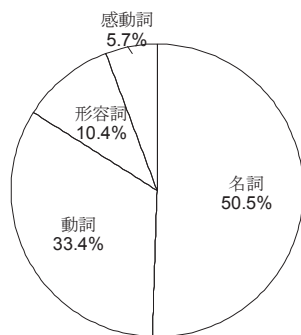
図1 園芸活動中の会話における各品詞の出現割合



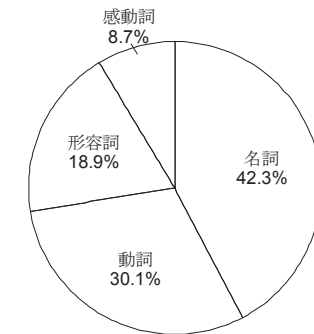
a. ジャガイモの種イモの植付け



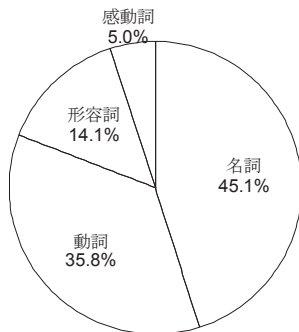
e. 花苗・野菜苗の移植



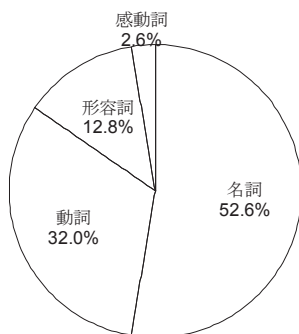
b. 花・野菜の種まき



f. 創作活動「押し花クラフト」



c. エンドウマメの収穫



d. ワタの種取り・発芽苗の観察

4. 考察

本研究の目的は、認知症高齢者を対象とした園芸療法プログラム中の発語量および品詞割合を調査し、園芸活動プログラムをより効果的に活用できる可能性について検討することである。

筆者らは、認知症高齢者を対象とした園芸活動プログラムにより会話数が異なることを、経験的に感じていた。例えば、作業がわかりやすく、作業そのものに集中できる、言い換えると「没我性」のあるプログラムでは、コミュニケーションが少なくなる、といったものである。しかし、あくまで経験値に基づくものであり、プログラムによる会話数に関して定量的に調査した研究は見当たらない。そこで、これについて検証することにより、認知症高齢者に対する園芸療法介入目的に沿って、より効果的な園芸療法実施につながる可能性が広がると考えた。そこで、認知症高齢者に対し、6種類の異なる園芸活動プログラムを実施し、活動中の会話から単語の総数および品詞分類について検証した。

単語の総数について、結果は、表3に示す通り、単語の総数が多いプログラムは、「花・野菜の種まき」「花苗・野菜苗の移植」「ワタの種取り・発芽苗の観察」で、単語数が少ないプログラムは、「ジャガイモの種イモの植付け」「創作活動「押し花クラフト」」であった。また、表4に示したように、単語の総数が多い「花・野菜の種まき」

では、「ありがとう」の出現回数は21回で最も多く、これを単純に考えると、「出現回数21回」割る「対象者5名」であるから一人につき、およそ4回発言していたことになる。対して単語の総数が少ない「ジャガイモの種イモの植付け」では、「ありがとう」と発するのは一人につき1回にも満たなかった。これより、「花・野菜の種まき」では、「ジャガイモの種イモの植付け」よりも単語の総数が多く、その中でも「ありがとう」の言葉が頻回に使われるプログラムとなる特徴があると考えられた。単語総数が多かった3つのプログラムの特徴としては、プログラムに使用した植物材料や道具類が高齢者には使い慣れた物品ではなかったことや、初めて経験する、または、適切に実施するには支援者から教授してもらう必要がある作業であった。また、支援者側も参加者に迷いが出たり、作業への集中が途切れることを避けるために声掛けを行ったりしたので、それに対しての返答が単語数に影響したとも考えられる。一方、単語数が少なかったプログラム「ジャガイモの種イモの植付け」については、種イモを植えるために畑土を耕したり、畝を立てたりする作業がある。また、「創作活動「押し花クラフト」」では、参加者が自己表現できるもので、かつ、参加者の創造意欲を作品として形にしていく作業になる。両方に共通しているのは、厳密な正確性を求める作業ではないこと、目的のものがあって、そのために我を忘れて集中して取り組む「没我性」のある作業活動だということである。この没我性により、作業中の発話の少なさに繋がったと考えられる。さらに、畑土を耕したり、畝を立てたりする作業については、認知症高齢者だったとしても農作業経験者であれば耕作道具の鋤を使った経験やジャガイモの種イモを植えた経験があり、支援者が改めて教授したり説明する必要はなかったからだと考える。

単語における品詞の出現割合について、園芸活動による有意差が認められた。そこで残差分析を実施した。その結果、会話の単語における品詞の残差の絶対値合計が最も小さい園芸活動は、「ジャガイモの種イモの植付け」であった。「残差の絶対値合計が最も小さい」とは、「標準的である」と置き換えることができる。すなわち、「ジャガイモの種イモの植付け」で得られた「名詞:動詞:形容詞:感動詞 = 53.5:34.7:8.2:3.5 (≒ 54:35:8:4)」という品詞出現割合は、本研究で実施した6種類のプログラムの中での品詞の標準的な出現割合であることを示す。品詞が標準的な出現割合から最も離れた割合となったのは「創作活動「押し花クラフト」」で、その割合は、名詞:動詞:形容詞:感動詞 = 42.3:30.1:18.9:8.7 (≒ 42:30:19:9)であった。すなわち、標準的な割合から、名詞・動詞が減少し、形容詞・感動詞が増大した。表5に示す通り、形容詞では、「いい」の出現回数は24回で、これを単純に考えると、一人につきおよそ5回発言していたことになる。同様に、「可愛い」の出現回数は12回で一人につ

きおよそ2回、感動詞の「ありがとう」の出現回数は19回で一人につきおよそ4回発言していたことになる。いずれも、ポジティブな感情がその背景にあると考えられる単語である。

「ありがとう」という言葉は、会話中の総単語数が多い「花・野菜の種まき」の活動で最も多く聞かれた言葉であり、品詞別では「創作活動「押し花クラフト」」の活動中に最も多く使われていた感動詞でもあった。この2つのプログラムの共通した作業特性には、①作業工程に順番があり、その順番を追って作業を進めていく必要がある ②認知症高齢者にとって初めての園芸道具や植物材料を使用 ③材料の押し花（乾燥した花や葉を破らないよう慎重につまむ必要がある）、花と野菜の種（細かい粒状）、道具としてのハサミやボンドなどを扱うには安全性や慎重性を要する等が挙げられる。このため、活動中は参加者に対して支援者の関りが多くなり、会話量が増えたことが考えられる。また、創作活動の後には自分の作品を他者に紹介し賞賛を受けるという時間を設けた。これにより、参加者へポジティブなフィードバックが行えたことも、感動詞の出現には繋がっていたと考えられる。

山根は、「成功体験とは、最初にめざしたものと多少違っていても、結果的に「よかった」「なんとかなった」「思ったよりうまくできた」「これでもいいんだ」といった思いで物事を終えることである。そのような成功体験は快い体験として新たに記憶に加えられる。」と述べている¹²⁾。今回の研究で行った創作活動でも同様に、快い体験をし、ポジティブな感情が生まれ、「いい」や「ありがとう」という感動詞の言葉になったのではないかと考える。

以上より、ポジティブな感情を表す単語の出現割合を増大させる特徴のあるプログラムがあることが明らかとなった。このことは、ポジティブな感情を計画的に促し得るプログラムを立案できる可能性があることを示唆している。

本研究の結果により、園芸療法プログラムによって、発語の量や発語の品詞割合に特徴が生じる可能性が明らかとなった。これは、認知症高齢者のための園芸療法プログラムで「快の体験やポジティブな感情を引き出す」、または、「集団で共有体験を持つことでコミュニケーションを促す」「(発語量が少なくても)手続き記憶を活かして集中して何かに取り組む」等、対象者の園芸療法目的に沿って、環境設定や使用する材料・道具、声掛け等の介入方法を選択し、適切に使い分けることで、対象者に対してより効果的に園芸活動を活用できる可能性を示した。

今後は、園芸療法プログラム内容や対象者への支援者による関わりについて検討し、対象者の感情の起伏の推移を明らかにすることで、園芸療法プログラムの効果的な活用方法について検討したい。

まとめ

本研究では、認知症中等度の高齢者を対象に、6種類の園芸活動プログラムを実施した。プログラム実施中の対象者の会話から、単語の総数および品詞の出現割合について解析した。園芸活動プログラムを対象者の園芸療法介入目的に沿って、適切に計画することで、園芸活動プログラムが対象者に対してより効果的に活用できる可能性があることが明らかとなった。

謝辞

本研究に多大なるご協力をいただきました村井恵様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 松下太：認知症の人へのリハビリテーションアプローチによる生活行為と QOL の改善～作業療法を中心に～，森ノ宮医療大学紀要，11：25-32, 2017.
- 2) 山口晴保：認知症の脳活性化リハビリテーション Brain-activating rehabilitation for dementia. 老年期認知症研究会誌，18：133-139, 2011.
- 3) 一般社団法人 日本神経学会：認知症疾患診療ガイドライン 2017. 医学書院，東京，p.67, 2017.
- 4) 一般社団法人 日本認知・行動療法学会ホームページ，〈<http://jabt.umin.ne.jp/cbt/>〉，[accessed 2021-10-15]
- 5) 山根寛：リアリティー・オリエンテーションの現状と課題．認知症の最新医療，2 (4)：175-178, 2012.
- 6) 山根寛，澤田みどり：ひとと植物・環境 療法として園芸を使う．青海社，東京，p.112, 2009.
- 7) 田崎史江：補完・代替医療 園芸療法．金芳堂，京都，p.76, 2006.
- 8) 増谷順子：園芸活動における軽度～中等度の認知症高齢者の個人特性を生かした支援方法の検討．日本認知症ケア学会誌，11 (2)：576-589, 2012.
- 9) 増谷順子，太田喜久子：軽度・中等度認知症高齢者に対する園芸活動プログラムの有効性の検討．人植関係学誌，13 (1)：1-7, 2013.
- 10) 寺岡佐和，小西美智子，原田春美，小野ミツ，宮腰由紀子：認知症高齢者を対象とした園芸活動が認知機能および心理社会的機能に及ぼす影響の検討．広島大学保健学ジャーナル，11 (1)：10-19, 2012.
- 11) 寺岡佐和，小西美智子，小野ミツ，宮腰由紀子：認知症高齢者への園芸活動が認知機能にもたらす効果．老年看護学，21 (1)：59-68, 2016.
- 12) 山根寛：ひとと作業・作業活動 ひとにとって作業とは？どのように使うのか？ 第2版．三輪書店，東京，p.173-174, 2007.